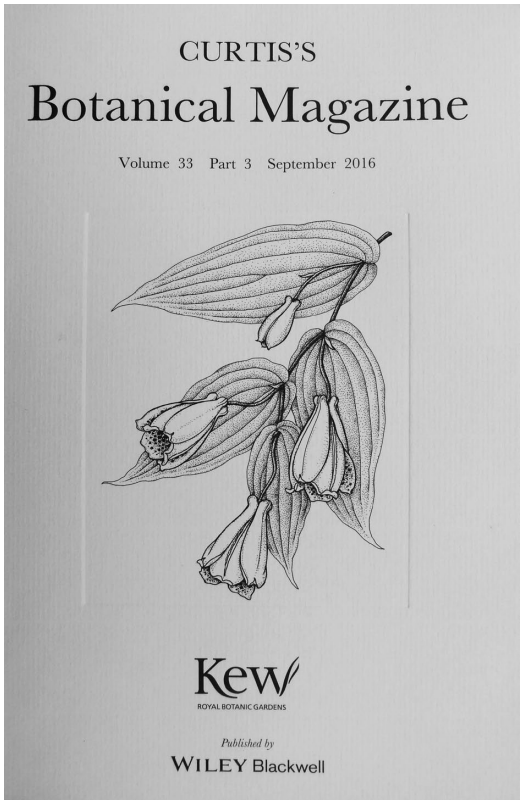
## 新 刊 Book Reviews

□**Curtis's Botanical Magazine 2016 vol. 33(3): 191–291. September 2016**. Royal Botanic Garden, Kew. £10. Print ISSN 1355-4905.

1787年創刊のカーティス・ボタニカル・マガジンの第33巻3号（2016年9月）は日本植物特集号となっているので，紹介しておきたい．本誌には毎号興味深い記事が登載されており，日本植物に関連する記事も多い．この第33巻3号では「まえがき」に2016年にKew植物園，2017年に国立科学博物館と東京大学博物館とで開かれる日本植物のボタニカル・アート展に合わせて刊行されたとある．2016年の展覧会の図録は『Flora Japonica 日本植物誌』の書名で既に出版されている．第33巻3号はKew植物園のボタニカル・アーティスト山中麻須美氏が企画・編集したという．本号には11種が載せられており，新種ヒゴコバイモを含む．各種について本誌の主眼である色彩の写生図 (plates 836–847) と図解（線画）があり，その記載・解説と多くに生態写真がつく．写生図・図解は最後のヒゴコバイモ（新種）を除いて日本のボタニカル・アーティストによって描かれている．含まれている種の和名（著者・画家）を挙げると次の通りである．トガサワラ（大橋広好・小西美恵子），オオヤマレンゲ（邑田裕子と邑田　仁・端　眞由美），ヤマトリカブト（門田裕一・斎藤光一），ワサビ（岩科　司・米田　薫），サンショウバラ（大場秀章・芝田美智子），アマミヒイラギモチ（永益英敏・安江尚子），コミネカエデ（Martyn Rix（本誌編集者）・石川美枝子），アカモノ（米倉浩司・佐々木啓子），アマミテンナンショウ（邑田　仁・石川美枝子），キヌガサソウ（田村　実・山中麻須美），ジョウロウホトトギス（池田　博・山中麻須美），*Fritillaria kiusiana* L. Hill ヒゴコバイモ (Laurence Hill (Kew)・L. Hill)．写生図は図鑑の植物図とは異なり，各種の特徴と繊細な美しさが正確によく描かれている．植物の描き方に画家の特徴がでており，楽しく見ることができる．惜しいことに印刷の悪いところがあるのは残念で，オオヤマレンゲでは花弁の色が白いバックでつぶれていて，平面的な感じがする．解説は各種ごとに著者が自由な取り上げ方をしており，それぞれに優れた記載と随筆になっている．

（大橋広好 H. Ohashi）




□大村嘉人：**街なかの地衣類ハンドブック**　110 × 182 cm. 80 pp. 2016. 文一総合出版．￥1,400＋税. ISBN 978-4-8299-8132-0 C0645.

普段，よほど気をつけていないと見逃してしまう，街中の地衣類を紹介している．小さいハンドブックの中に地衣類の多様性，形態，構造，繁殖，呈色反応などと共に生育基物や生育場所，地衣成分の検出法や標本の作り方，地衣類を利用する小動物の話までが盛りだくさん紹介されている．本書では58種の地衣類が種名をたどりやすいように，地衣体や生殖器官の色を黄色系，黄緑色系，緑色系，暗色系，灰緑色系，白色系地衣類の6群に分けて紹介してある．各種の特徴は生態写真や地衣体の拡大写真に種の特徴が概説されている．扱われている種には固着地衣類も多く，実物を見つけ出すことは一般の人たちには難しいと思う．しかし，ルーペで見える地衣類を本書の写真と見比べてみたら，街中に広がる多様な地衣類の世界が見えてくるだろう．この小冊子をポケットに忍ばせて，ルーペ片手に身近な地衣類を探索してみるのも一興である．また，観察会などの副読本と

して活用するのも良いだろう．

種の和名の後に漢字名が添えられている．種名の意味を示すためのものだろうが，これはあくまでも著者の余興と思う．

（柏谷博之 H. KASHIWADANI）

□国京潤一：**東北のアザミとその仲間たち** A5. 120 pp. 2016. 私費出版．￥2,500（税＋送料込）. ISBN No number.

東北地方に分布するアザミ属とその近縁属（アザミ連）の植物図鑑である．アザミ連としては，アザミ属のほか，ヒレアザミ属，トウヒレン属，キツネアザミ属，ヤマボクチ属，タムラソウ属などが扱われている．掲載種は，アザミ属で 54 種，トウヒレン属で 24 種となっており，東北地方に範囲を限った図鑑としては異例の数である．本書は，現時点での東北地方のアザミ連を網羅しているといって良いだろう．

アザミ属に関しては，最初に花期における根生葉の有無，頭花のサイズ，頭花の咲く向き（上向き↔下向き）の違いに基づくグルーピングがなされている．本書を通じて各グループは色分けされていて直感的で分かりやすい．次にアザミ属における形態的特徴の解説がある．とくに，総苞片の列数の数え方や，腺体の形態と変異などの解説はこれまでになかったものである．なお，腺体とは総苞片の背軸側中肋に位置する構造物で，粘着物質を分泌する組織のことである．ノアザミのように粘着性の高いよく発達した腺体をもつもの，または腺体が痕跡的になって総苞が粘らないもの，さらには腺体に当たる組織が元々ないものもある．

本論は，一部を除いて，1 種に 1 ページをあて，全体，茎葉，頭花，腺体，小花，総苞片の画像と文字解説がある．総苞片の列数はなかなか数えにくいものだが，本書では各片を総苞から外して並べてあるので分かりやすい．写真は自然光で撮影されており，補助光は使われておらず，全体的に軟らかい仕上がりとなっている．この辺りは著者のこだわりを感じさせるところであるが，腺体や小花，総苞片などはストロボなどの補助光を使うかデジタル画像の加工を行うなどして，コントラストを上げた方が良かったように思う．

分類学的に難しいとされている植物群を扱っているため，取り上げられている植物の同定が気になるところであるが，誤同定はなかった．ただ，53 ページのトネアザミはタイアザミとすべきである（学名はこのまま）．トネアザミ *Cirsium tonense* Nakai の基準標本は群馬県みなかみ町で得られたものであるが，これはナンブアザミの葉の切れ込みが深いものである．92 ページにはイワテヤマトウヒレン *Saussurea* ×*iwateyamensis* M. Kikuchi がある．これは岩手山に知られている植物で，イワテヒゴタイとヤハズトウヒレンの雑種起源とみなされている．しかし，早池峰山には両親種と推定される植物はあるものの，イワテヤマトウヒレンに当たる形はこの山には知られていない．イワテヤマトウヒレンは雑種起源ではなく，岩手山固有の独立した実体として存在しているのかもしれない．

アザミ属に興味のある方々，同定する必要に迫られている方々にお薦めしたい一冊である．とにかく，東北地方のアザミ属に関してこれだけ詳しく書かれた図鑑は他にはない．本書の入手希望者は著者宛に葉書またはメールで連絡をとられたい．連絡先は，981-[redacted] 宮城県仙台市[redacted] E-mail: tukumogusa@hotmail.com

著者は『東北の花』の完成を目指しているとのこと．時間と労力がかかると思われるが，その出版が大いに待たれるところである．

（門田裕一 Y. KADOTA）

□鈴木三男：**クリの木と縄文人 ［ものが語る歴史 33］** A5. 155 pp. 2016. 同成社．￥3,500＋税. ISBN 978-4-88621-7479 C3321.

「はじめに」で著者は，本書はクリを様々な角度から取り上げたが，「クリの実の生産，利用，文化については他の類書に譲る」と述べる．文頭の ‘ クリの実 ’ が，生産だけに係り，利用と文化には係らないのか，それとも ‘ クリの実 ’ が，生産，利用，文化すべてに係るのかは，大きな違いで悩ましい．全体を読んで，どうやら ‘ クリの実 ’ の語が生産だけでなく，すべてに係ると考えられ，ほっとした．なぜなら著者が本書でもっとも書きたかったことは，クリを基軸とした文化であると考えられるからだ．

私は著者をかなりよく知っている，と自負している．植物学の領域としての木材ならびに材化石，樹木形態学に大きな業績を残した．いつしか植物遺体，遺跡にも興味を広げ，そちらでも大きな仕